## Natural Resource Environment and Humans

3つの両面調整体に刻まれたエピソード

# 資源環境と人類

### 論文

一神子柴遺跡における黒曜石製石器のライフヒストリー分析ー	堤	隆	1
長野県中部高地, 広原湿原周辺域に分布する黒ボク土層の意味 佐瀬 隆・	細野	衛	17
広原遺跡群第   遺跡・第    遺跡から出土の黒曜石製石器の原産地解析: 判別プログラムの修正と判別結果 土屋美穂・	隅田祠	光	31
黒曜石採集地の推定のための自然面解析法	中村由	克	43
広原遺跡群第   遺跡における黒曜石をめぐる人類の行動	橋詰	潤	53
中部高地における後期旧石器時代前半期の黒曜石獲得をめぐる行動系: 原産地分析の考古学的データ統合	島田和	高	67
■ 報告 新潟県真人原遺跡 A, C, D 地点出土の黒曜石製石器の産地推定 望月明彦・	小野	昭	83
島根県隠岐諸島黒曜石原産地の調査報告(4) 一隠岐の島町久見宮ノ尾遺跡の試掘調査と原産地踏査— 及川 穣・隅田祥光・稲田陽介・早田 勉・ 岡本一馬・勝田雄大・藤井奏乃・			93
ハンドヘルド型蛍光 X 線分析装置 Delta Premium DP-6000 による 黒曜石の非破壊全岩化学組成分析	眞島英	壽	109
南ドイツ早期中石器時代のボイロン文化について	小野	昭	119
■ 黒耀石研究センター活動報告 2017			131



### 南ドイツ早期中石器時代のボイロン文化について

小野 昭1\*

#### 要 旨

更新世末から完新世初頭にかけて、南ドイツのドナウ川上流域には晩期旧石器から中石器時代にかけての洞窟遺跡や岩陰遺跡が集中し、氷河期の終わりの頃の人類が環境変動にどのように対応したかという課題に多様な話題を提供している。そのなかでも完新世初頭プレボレアル期の文化を議論する際に論文、報告書などでかならず出会うのがボイロン文化(以下ボイロニアン)の用語である。これはドナウ川上流のボイロン地方にあるイェーガーハウス洞窟遺跡の層位的な発掘に基づく早期中石器時代の3段階全体を表現する文化名である。調査者タウテはこれをボイロニアン A, B, C と呼び分け、それが後の編年の基準になっている。頻繁に言及されるボイロニアンの詳細は、1971年のタウテの教授資格試験論文中にある。しかし、未刊行のまま1995年に没したため、一般には1970年代に書かれたタウテの論文と概説などの簡単な記述に依拠して議論されている。テュービンゲン大学考古学研究所に保管されている1971年論文のコピーをもとに分類の基準と構造を点検し、その意義と現状における問題点を明らかにした。その結果、タウテの分類は基本的に今日でも有効である。しかし、すでに複数の研究者が指摘するようにボイロニアンのAとBは明確には分離できないという。さらに詳細な内容を知るには、イェーガーハウス洞窟遺の正報告書とタウテの1971年のモノグラフの出版を待たなければならない。

**キーワード**:南ドイツ,ドナウ川上流,イェーガーハウス洞窟遺跡,早期中石器時代,ボイロニアン

#### 1. はじめに

更新世から完新世への移行期における人類と自然環境の問題は、研究の進捗している地域ではどこにおいても関心の高い、大きなテーマを形成している。長野県長和町所在の広原遺跡群の調査結果(小野ほか、2016a)を踏まえ、成果を比較考古学的な観点から世界の中に位置づけるため、筆者は比較対象をオーストリアの北チロルにあるウラーフェルゼン遺跡(Schäfer 2011)を中心に据え検討をすすめてきた(小野ほか 2016b)。ドナウ川上流域だけでなく南ドイツの広い地域を対象とした論文、報告書、あるいはさらに広域の中部ヨーロッパにおける更新世末から完新世初頭を扱う著作で必ず出会うのが、ボイロニアン(Beuronien、Beuronian、ボイロン文化)である。

特徴的な石器の形態や型式の分布範囲(ドイツ語圏でいう Formenkreis)は、石器群全体に占める特徴型式の

割合、素材から完成形態に至る一連の過程の中にどの程度位置づけることができるか否かで、広がりの線引きの確度が異なる。また石器の場合、一般に土器を基準にした特徴型式の広がりの線引きよりも分解能は粗い。完新世初頭のプレボレアル期の早期中石器時代石器群の特徴型式の広がりは、後期旧石器時代終末のマグダレニアン期の石器群に比較しても、広範な分布域を示す。単純な組成と、細部を除けば一般に形態学的、型式学的な差を指摘しにくい形状がこうした分布上の状況に反映されている一面もあるだろう。

後氷期のアルプス北麓に出現した広大な無氷空間に、早期中石器時代の人びとがどのように移動し、その結果がどのような石器の分布型として残されたのか。広がりの問題は、石器製作に必要な石材の獲得をめぐる動きと関連する。研究する側からすれば、定義無くして広がりの設定は無い。逆に言えば、研究の現状では、様々な石器群の分布実態をどのように概念的に把握しているのかが注目される。

<sup>1</sup> 明治大学研究・知財戦略機構客員研究員 〒 101-8301 東京都千代田区神田駿河台 1-1

<sup>\*</sup> 責任著者:小野 昭 (ono@tmu.ac.jp)

こうした問題状況に沿い、頻繁に言及されるボイロニアンの実態と現状が抱える限界を明らかにするのが本稿の目的である。更新世末から完新世初頭のドナウ川上流域の諸現象については、特に90年代に入ってから、狩猟対象動物、植生、利用の石材獲得の問題など、生態学的な観点からの接近も多く、多様な話題を提供している(Jochim 1998, 2006, 2008; Fisher 2002; Holdermann 2006)。しかし、ここではボイロニアンの石器群の実態把握の問題に限定する。ボイロニアンの定義関連の事項は他の要素を排除しても独立して扱えるからであり、様々な要素を入れて議論することは問題を混濁させるだけである。

#### 2. ボイロニアンの研究小史

南ドイツのドナウ川上流域では、1961年からテュービンゲン大学のW.タウテが洞窟遺跡や岩陰遺跡を中心に精力的に発掘調査を開始するまでは、旧石器時代終末から中石器時代にかけての研究は極めて手薄であった

(Taute 1971; 1980). 1960 年代の半ばにヨーロッパの中石器時代を包括的に記したH.-G.バンディの論文 (Bandi 1966) においても,西南フランスと東ヨーロッパの間の地域の記述はない.

フランス,スイス,オランダ,西北ドイツ,東ドイツのテューリンゲン,東ドイツのエルベ川とオーデル川の間の低地,ポーランドなどで目覚ましい調査の進展があったのに比べ,南ドイツは1960年代の初めごろまでは特に層位的な発掘調査にもとづく研究の進捗が遅れていた.1962年以降のドイツ学術振興会DFGの支援による晩期旧石器 - 中石器時代の研究プロジェクト,1971年までのバーデンヴュルテンベルク州記念物局埋蔵文化財部の援助,ならびに1971年以降ドイツ学術振興会支援によってテュービンゲン大が牽引した特別研究領域プログラム第53号(古生態に焦点を当てた古生物学的研究)はこうした遅れを取り戻した.一連のプロジェクトは、ドナウ川の上流域を中心とした南ドイツの後期旧石器時代末のマグダレニアン期から新石器時代初頭の帯紋土器の出現までの6000年間に、調査研究の橋渡しを実

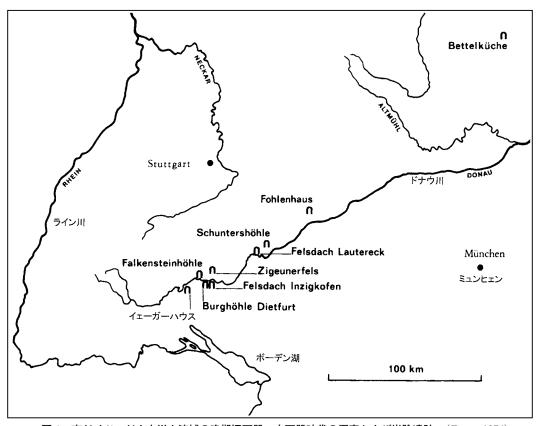


図1 南ドイツ、ドナウ川上流域の晩期旧石器・中石器時代の洞窟および岩陰遺跡 (Taute 1974)

現したのである (Taute 1975). 結果的に鍵になる多くの洞窟と岩陰遺跡を発掘によって推進したのがテュービンゲン大学のタウテである. 図1に示す洞窟と岩陰遺跡はすべて氏によって調査された.

なかでも、1)マグダレニアンの伝統を引く石器が 残る晩期旧石器時代の様相から、それが消失して最も 初期の中石器時代の石器群が成立する様相を連続的に 層序に基づいて明らかにしたツィゴイナーフェルス Zigeunerfels 洞窟遺跡と、2)早期中石器時代を層位に 基づいて細分することに初めて成功し、A、B、Cの 3段階を区分してこれをボイロニアンとして継起する 3つの異なる段階の文化を提唱したイェーガーハウス Jägerhaus 洞窟遺跡の調査は、特筆される。

ボイロニアンの石器の実態に関わる遺跡と遺物は、したがってイェーガーハウスである. 遺跡はバーデンヴュルテンベルク州、トゥトリンゲン郡、フリーディンゲン市のブロンネンにある洞窟(北緯 48°2′、東経 8°58′)で南東に開口する. ドナウ川の右岸から水平距離で 300 m東にある切り立った洞窟で海抜 680 m-690 m、ドナウ川との比高 70 m-80 m である. 開口部幅 13 m、高さ12 mのこの洞窟の発掘は 1964 年から 1967 年にかけてタウテが実施した(Taute 1971).

晚期旧石器時代/中石器時代の移行期から近現代まで連続する15枚の層準を区分し、早期中石器時代(第13層~8層)、晚期中石器時代(第7層・6層)を区分した。6層と5層の間にのみ土取りなどにより新石器時代、青銅器時代の層の欠損があるが、そのあとはローマ以前の金属器時代(5層)、ローマ時代(第4層)、中世(第3・2層)、近現代(第1層)と続く。第13層から8層までの6枚の層準が早期中石器時代のボイロニアンである。遺跡のあるボイロンBeuron地方の名を取ってボイロニアン(ドイツ語ではボイロニエンBeuronien)と名付けられた。全層準の出土遺物総数約7000点、その内の約100点の石核と、石刃・剥片約6500点が発見された。完成形態のわかる細石器の総数は約350点である。

この要約の内容はドナウ上流の小さな都市フリーディンゲンを紹介する一般書に書かれたものである(Taute 1972). これに編年表とボイロニアン A, B, C の指標的な石器が図示されている. おそらくボイロニアンとい

う用語が使われた最初期の文章に属すると思われる. そこではこの洞窟遺跡で初めて早期中石器時代の文化的発展が層位的に明確に3段階に区分されたとし,これを「ボイロニアン」とよぶと記している. そして早期中石器時代の3段階ボイロニアンA,ボイロニアンB,ボイロニアンCは,後続の晩期中石器時代の石器群とは異なることを強調した. 一般への解説の意味の強い文章であるので石器の形態・型式学的な記載はなく指標的な石器の線画(実測図)が示されているだけである.

その後、ボイロニアンの石器群の内容が記されたのは、筆者の知る限り1974年が最初である(Taute 1974). その翌年に南ドイツの晩期旧石器と中石器時代の調査の進捗に関する包括的な論文が書かれている(Taute 1975)が、ボイロニアンの石器の特徴記載の内容は1974年のそれと全く変わらない. すなわち石器組成の特徴におけるボロニアンAは「形の整わない石刃から作出された狭長の台形石器、鈍角二等辺三角細石器、凸基尖頭細石器、背腹両面基部加工尖頭細石器」である. ボイロニアンBは「鋭角二等辺三角細石器、凹基尖頭細石器、背腹両面基部加工尖頭細石器」にアンCは、「顕著な不等辺三角細石器、凹基尖頭細石器」の組み合わせである. ボイロニアンの呼称に関しては、上記1972年の記述とほぼ同じ表現である.

ストリート (Street, et al. 2001) は、研究史を概観して南ドイツにおける調査研究は、1990年代の研究が生態学や経済・生業の局面に集中しているのに比し、1970年代の研究は編年のテーマに力点が置かれている旨の評価をしているが、これは当然である。60年代から本格的に発掘調査を伴った組織的な調査が開始されたドナウ川上流域では、研究の初期のあり方としてまず遺物の正確な時空分布、つまり編年と分布の特徴を把握することから始まるからである。表採資料が圧倒的に多い中石器時代資料に確実な年代の軸を与えるために、層位的に石器群の変遷を追跡しやすい洞窟・岩陰遺跡が戦略的に調査されたのである。放射性炭素年代試料の採取と共に様々な自然科学的な調査も並行して計画的に実践された(Taute 1980)。

しかし、イェーガーハウスだけでなく、一連の鍵にな

る洞窟遺跡、岩陰遺跡の正報告書がほとんど未刊行のままタウテは急逝した(Wolfgang Taute 1934-1995). 第一次資料を記載した詳細な報告書が残されていないため、概報や論文中に記された簡単な記述から定義の内容を理解するしか方法はなくなった. 従って刊行された限りにおいてボイロニアンの内容は、いまみた Taute (1972, 1974, 1975)が主要なものである.

#### 3. どのように理解されているか

タウテがおこなったボイロニアンの特徴の記述で最も詳しい内容は、タウテの未刊行の教授資格試験論文にある(Taute、1971). アメリカの研究者は刊行されていないので一切引用しない傾向にある(Fisher、2002; Jochim、1998、2006、2008)が、事実存在する. ドイツでは教授の資格は博士の学位と同様、国家資格試験に合格することを必要とする. 考古学では一般に、博士の学位を取得後さらに研究の蓄積を踏まえ、教授資格に必要な一要素である浩瀚な論文(モノグラフ)、ならびにおよそ1年の期間を要する一連の試験に合格しなければならない. つまり教授資格を取得したものは博士の学位とともに終身資格である. いまは私立大学も若干は誕生しているようであるが、大学はそれまで国立大学のみであった

タウテの未刊行教授資格試験論文は現在、テュービンゲン大学考古学研究所の図書室に紙ベースのコピーが1部保管されている。以下、これに依って、石器によるボイロニアンの特徴の記述と、そこに見られる方法の構造を検討し、その内包と外延を可能なかぎり明確にしておきたい。この論文はTaute(1980)の文献リスト中において、Das Mesolithikum in Süddeutschland、Teil 1:Chronologie und Ökologie(南ドイツの中石器時代、第1部:編年と生態学)の題名でTübinger Monographien zur Urgeschichte のシリーズとして刊行予定であると記されていたが刊行されなかった。

保管されているこの論文はタイプ原稿で A4 判 319 頁,図表 38 枚,写真を含む図版 141 枚であるが,図表 と図版の一部はコピー版には欠けているものがある.こ こではボイロニアンの定義に関わる部分にのみ言及す る. 石器を「形態学」に準拠しAからGまで7つに分類している. しかし以下見るように形態ごとに厳密に分離しすることなく幾つかを一まとめにしている部分もある. すなわち.

- A. 細石器 (Mikrolithen)
- B. 切断技法の結果生ずる副次的製作物(Abfallprodukte der Kerbtechnik) <いわゆるマイクロ・ビュラン: 小野補足>
- C. 尖頭器・背付ナイフ (Spitzen und Rückenmesser)
- D. さまざまな二次加工剥片 (Unterschiedliche retuschierte Stücke)
- E. 彫器 (Stichel)
- F. 掻器·削器 (Kratzer und Schaber)
- G. 石核 (Kernsteine)

これをもとに、それぞれを「型式」に分類. A は 40型式、B は 7 型式、C は 12 型式、D は 11 型式、E は 9型式、F は 8 型式、G は 7 型式に細分している。

イェーガーハウス洞窟遺跡の層序は、最上層の第1層 から第15層まで区分されている.洞窟堆積の図面を見 る限り第15層~第6層までは間層を挟んで整合的に堆 積している. 第15層は晩期旧石器 (Taute 1971). あ るいは晩期旧石器 – 中石器時代の移行期(Taute 1972) と記載されている. 第14層は編年表によって「?」が 入れてあったり (Taute 1972), ブランクにしてあった り (Taute 1975) で、明確でない、第13層~8層まで が早期中石器時代, 第7, 6, 層が晩期中石器時代であ る. 第5層がローマ以前の金属器時代. 第4層がロー マ時代, 第3, 2, 層が中世, 第1層が近現代である. タウテは中石器時代を大きく2分し Frühmesolithikum, Spätmesolithikum の用語を使っている. 前期中石器, 後期中石器、あるいは早期中石器、後期中石器としても よいが、語感を活かしてここでは早期中石器、晩期中石 器と訳して使用する.

Taute (1971, p. 240以下) によって要約すると、イェーガーハウスの早期中石器は石刃の形状は多様で規則性があまり見られない. 一連の細石器は連続的に発展する3段階 A, B, Cからなると認められる. A 段階は第13文化層だけに認められる. 段階 B は第12~10層、段階 C は第9層、8層と、移行期の7-8層に認められる.

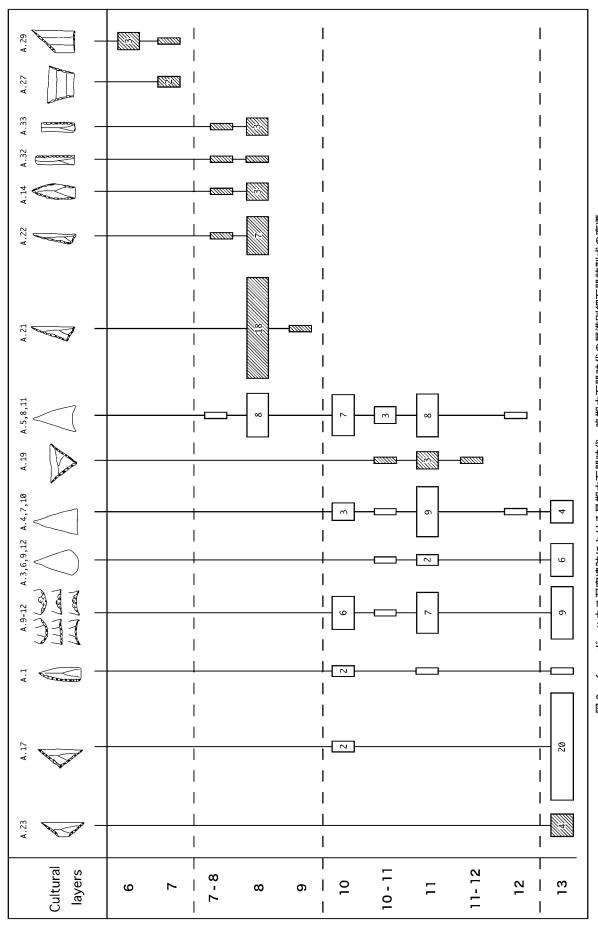


図2 イェーガーハウス洞窟遺跡における早期中石器時代・晩期中石器時代の層準別細石器諸型式の変遷早期中石器:ボイロニアン A (13 層),ボイロニアン B (12·10 層),ボイロニアン C (9-7/8 層),晩期中石器:7.6 層として区分できる型式は箱型の中を斜線で表現している.(Taute 1971,図 36)

Schräge wand	Lower Part 5		~			
Geis- kirche	Ш		M.			
Bettel- küche	ო	4				
Steinberg- wand	Upper Zone IV Middle		Lower Zone IV			
Fohlen- haus		-	,	74		
Schunters- Cave	က				4	
Inzigkofen Rockshelter	Upper third Upper third of Mesolithic Layer Layer	Lower third of Mesolithic Layer				
Falken- stein Cave	Upper third of Mesolithic Layer	Lower third of Mesolithic Layer	   			
Jägerhaus- Cave	2	8 6	10	1. 1.	13	
Division of Mesolithic	Late Mesolithic Beuronian		Beuronian	m	Beuronian A	
<u>`</u> `⊡ ⊻	Σ	Early Mesolithic				
Typical forms	A.7 A.29	A.21 A.22 A.14 A.32 A.33	A.1 A.19		9,12	

図3 イェーガーハウス洞窟遺跡をはじめとする南ドイツの中石器時代遺跡の編年(Tante 1971, 図37. コラムの中のドイツ語は英語に直した. 小野.)

1972 年以降に刊行された論文や解説では説明を省いているが、最初の1971 年の論文 (pp. 240-241) では二つの基準から層序と形態・型式分類の関係を整理している。ただ、層位的に出現、変遷、消滅の変化が追いやすい形態 A (細石器) で型式編年を組み立てている。ボイロニアンの定義に関する記述はもっぱらこの細石器だけで議論されている。

第一の基準は、特定の段階にのみ出現する型式で、図2中の箱型に斜線で示したものである。なお図の箱型の中の数字はその石器の出土点数である。A段階は狭長の台形石器 Langschmale Trapez(図2中のA.23)である。B段階にのみ出現するのは、鋭角二等辺三角細石器 Gleichschenkling-spitzwinklinge Dreieck(A.19)である。C段階の指標は顕著な不等辺三角細石器 Stark ungleichshenklinge Dreieck(A.21)、超不等辺三角細石器 Extrem ungleichshenklinge Dreieck(A.22)、両側縁二次加工の尖頭細石器 Beidkantig retuschierte Mikro-Spitze(A.14)、背付ナイフ形細石器 Mikro-Rückenmesser(A.32、A.33)である。こうしてタウテは特定層準に特徴的な石器型式を抽出した。

続いて第二の基準は、相前後する2つの段階にまたがる型式である。段階 A と B に継続する型式が多い。鈍角二等辺三角細石器の A.17 は A 段階(13 層)に多い。しかし、B 段階(10 層)にも残る。背面・腹面基部に二次加工のある尖頭細石器(A.9-12)は似たような点数が A 段階、B 段階にある。凸基の尖頭細石器(A.3, 6, 9, 12)は A 段階に数は多く B 段階には少ない。一方平基の尖頭細石器(A.4, 7, 10)は逆に B 段階に多い。凹基の尖頭細石器(A. 5, 8, 11)は B と C 段階に出現するが A 段階にはない。

タウテはこうした事実を前に、尖頭細石器に関しては A、B 段階と B、C 段階にまたがる型式はあるが、A 段階 では背復両面二次加工から、B 段階で凸基、平基、凹基 へ、そして C 段階では凹基だけが継続するというよう に、A 段階から C 段階への次第に発展すると理解するのである.

以上,やや煩瑣であるが,タウテがイェーガーハウスで早期中石器時代の細分に初めて成功した層序と型式の分類の対応関係と構造は以上の通りである.ドナウ川上

流のボイロン地方のイェーガーハウス洞窟遺跡で層位的にとらえられた石器の組み合わせは、南ドイツの早期中石器時代に広く適用できるものであり、こうして時期的に区切られた型式圏は、したがってA段階、B段階、C段階をともなう"ボイロニアン"としての名称が与えられる、とタウテは記している(Taute 1971, pp. 244-245)、ボイロニアンはA、B、Cの3段階を包括する文化名としてその名が与えられている。しかし、実態はA、B、C各段階の細石器の特徴の記載であり、ボイロニアンが先行の晩期旧石器時代と、後行の晩期中石器時代とどのように定義上区分されるかは与えられていない。

これを整理してタウテは編年表を作成している(図 3). 繰り返し記すことは省略するが、編年表ではボイロニアン A, B, C の段階区分で明確に分離できる型式と、A と B, B と C に継続する諸型式が明確に区分されて表示されている.

<西南フランス>—<南ドイツ>の編年的な対応関係は、それぞれ、

晩期旧石器:<アジーリアン>—<ツィゴイナーフェル ス F. E. D >

早期中石器: <ソーヴェテリアン>--<ボイロニアン A, B, C >

晩期中石器: <タルドノアワジアン>—<イエーガーハ ウス 6・7 層>

で理解されている (Taute 1971, 1975).

#### 4. 現状

多くの場合ボイロニアンはタウテ 1972, 1974, 1975 の記載で理解され、一般化されている. 遺跡遺物の分布図を中心とする概説書でもこうした簡潔な記載を踏まえてボイロニアンの分布図も作成されている(Terberger 2014). 1971 年論文は未刊行であるので、そこまで遡って参照し、記している論文は少ない。ただボイロニアンの細分に関しては、その後の調査でボイロニアン A とボイロニアン B は分離できないと複数の指摘がある。ハーンはイェーガーハウスの東に隣接するディートフート洞窟遺跡では、ボイロニアン A と B の区分は常に明確であるとは言えないと指摘している(Hahn 1983: p.

Zigeunerfels ny	Jägerhaus- Höhle	Lautereck	Urgeschichtliche Perioden- und Stufen- Gliederung	Geologische und vegetations- geschichtliche Gliederung	C <sup>14</sup> - Alter B.C. (konven- tionell)
		D	Frühneolithikum (ältere Linienbandkeramik)	jüngeres Atlantikum	
	6	E	Spätmesolithikum	älteres	4 500
	8 9		Beuronien C Früh-	Post glazia	6 000
A	11 12		meso - Beuronien B  lithi - Beuronien A		7 000
С			kum Frühest- mesolithikum	Präboreal - -	8 000
D	15		Spät -		
E			paläo-		
F			lithikum	Spätglazial	10 000
G H H/J			Jungpaläolithikum (Magdalénien)		10 000

図4 南ドイツにおける晩期旧石器・中石器時代の編年の概要

上のコラムは左から、<文化層の連続(ツィゴイナーフェルス、イェーガーハウス、ラウターエックの各遺跡)>; <時期区分と層序区分>;<地質・植生区分>;<放射性炭素年代未較正 BC 表記>(Taute 1974, 1975)

381). ジョッキムも、遺跡名を明示していないが、その後の複数の遺跡の発掘の結果 A 段階と B 段階の特徴的な石器諸型式が一層準中に混在するので、早期中石器はボイロニアン A/B と C に 2 分することしかできないとしている(Jochim 1998: p. 57, 2008: p. 208). ただ、撹乱でもない限り一層準における複数型式の存在は混在ではなく共存と表現すべきである.

段階で分離できる型式、複数段階(A と B, B と C)に連続する型式をどう評価するか、第一の基準の分離と第二の基準による分離のどちらで評価するかということになる。形態に基づく型式分類は、本来形状に関する分類であるので、出土層位とは別の論理であって、層序と

は関係なく独立している. タウテは細石器 (1971 年論 文の形態分類群 A) を 40 型式に細分しているが,この全てが少なくとも一定の地域的広がりに分布論的な普遍性を持っているかどうかは別問題で, 徹底的な細分単位がみな型式として成立するか否かは石器製作上の細部調整, 作り手の癖,ならびにその空間的広がりなどの面からの点検が必要である. むろんそれは今ここでの課題ではない. その後の複数遺跡の発掘の結果,特徴型式が層位的にどのような分布をするか実際に点検された結果は,いまみたハーンとジョッキム等の指摘であり,これが現実であるとみるべきである.

タウテ没後, イェーガーハウスの資料を整理したホル

ダーマンによると、垂直・鉛直方向に石器の接合が少なからず認められるので層の細分に関しては批判的な検討が必要であるという。石器の接合は第6層と7層、7層と8層、10層と11層の間で認められる。しかしボイロニアンA(13層)とB(12、11、10層)の間では接合は認められず、またボイロニアンBとCとの間でも接合は無いという(Holdermann 2006: pp. 163-164)。これは、タウテがイェーガーハウス打ち立てた早期中石器時代の層位的な編年は基本的に変更はないことを意味する。現在標準的に認められている編年は図4の通りである。なおホルダーマンの再整理の結果の刊行は2006年の論文中で予告されていたが、その後出版されていない。

#### 4. 結論

定義に関連する記述は必要不可欠である. ただ定義は 多様な現実から特定の面に着目して限定を与えて概念的 に把握する作業であるから, その意義と限界を了解して おく必要がある.

ボイロニアンの定義に関わる制約的な条件は単純であ る. ホルダーマンも指摘しているように、イェーガーハ ウスは今日でも中部ヨーロッパにおける最も良好な層位 的な連続を示す遺跡であるが、タウテ自身による石器群 分析の結果や、ボイロニアンA、B、Cの区分に直接関 係しない層序に関する部分の詳細な記述は刊行されてい ないからである (Holdermann, 2006). 本稿では未刊行 論文中の定義に関連する部分のみであるが、分類の構造 を点検した. つまりタウテは先に見たように層位との関 係をもとに二つの基準で型式区分をおこなった. その構 造を最も良く可視化しているのが図2である. タウテ 1971年のモノグラフは層序に基づく石器の形態学的. 型式学的編年に焦点をあててまとめられているので. イェーガーハウス洞窟遺跡のもつ多面的な詳細を知るこ とは、1971年のモノグラフの刊行、ならびに正報告書 の刊行が実現しなければ難しい.

#### 謝辞

テュービンゲン大学考古学研究所に保管されている W. Taute の未刊行教授資格試験論文の全文を複写することを許 可いただいた H. ミュラーベック教授(当時)に感謝申し上げる. 2015 年夏に実施した本稿に関わる北チロルの現地遺跡の巡検調査は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 B (研究代表者:小野昭 15H03268) による. 山岳地の海抜 2000 メート前後に立地する遺跡を 3 日間案内いただいたインスブルック大学の D. シェーファー教授、同 S. ベルトッラ博士には深くお礼申し上げる. 本稿はこの科学研究費の成果の一部である.

最後に遥か昔に遡るが、筆者が当時西ドイツのアレクサンダー・フォン・フンボルト財団の奨学研究員としテュービンゲン大学の考古学研究所に留学中に、ヒューゴ・オーバーマイアー協会の年次大会があり、イェーガーハウス洞窟遺跡を含むドナウ川上流ボイロン地方の巡検に参加した、巡検の責任者で「ボイロニアン」提唱者のタウテ教授には、ボイロニアンのBとCの間に画期がある点など、1980年4月11日にフィールドで直接教示いただいた。既に故人であるが、生前のご教示に対し、ここに謝意の一端を記しておきたい。

#### 引用文献

- Bandi, H.-G. 1966 Die Mittlere Steinzeit Europas. In *Handbuch der Urgeschichte*, (Hrsg. K. J. Narr), SS. 321-346.Francke Verlag, Bern und München.
- Fisher, L. 2002 Retooling and raw material economies:

  Technological change in Late Glacial and Early Postglacial
  Southern Germany. In *Lithic raw material economies in Late*Glacial and Early Postglacial Europe. (Eds. L. E. Fisher,
  B. V. Eriksen) pp. 53-78. BAR International Series 1093,
  Archaeopress, Oxford.
- Hahn, J. 1983 Die frühe Mittelsteinzeit. In *Ureschichte in Baden-Württemberg*, (Hrsg. H. Müller-Beck), SS.363-392. Konrad Theiss Verlag, Stuttgart.
- Holdermann, C-S. 2006 Silex raw material procurement in the Mesolithic of the Upper Danube valley: Jägerhaus-Höhle-Type locality of Beuronien A, B, and C. In After the ice age: Settlements, subsistence and social development in the Mesolithic of Central Europe. (Ed. C.-J. Kind), pp. 163-173. Materialhefte zur Archäologie in Baden-Württenberg, Heft 78. Konrad Theiss Verlag, Stuttgart.
- Jochim, M. 1998 A Hunter-Gatherer Landscape: Southwest Germany in the Late Paleolithic and Mesolithic. Plenum Press, New York and London. 247p.
- Jochim, M. 2006 Settlement variability in the Early Mesolithic of Southwestern Germany. In After the ice age: Settlements, subsistence and social development in the Mesolithic of Central Europe. (Ed. C.-J. Kind) pp. 175- 180. Materialhefte zur Archäologie in Baden-Württenberg, Heft 78. Konrad Theiss Verlag, Stuttgart.
- Jochim, M. 2008 The Mesolithic of the Upper Danube and Upper Rheine. In *Mesolithic Europe*. (Eds. G. Bailey, P. Spikins), pp. 203-220. Cambridge University Press, Cambridge.

- 小野昭・島田和高・橋詰潤・吉田明弘・公文富士夫編 2016a 『長野県中部高地における先史時代人類誌 広原遺跡群 第1次~第3次調査報告書 』明治大学黒耀石研究センター資料・報告集1.342p.,東京、明治大学黒耀石研究センター
- 小野昭・島田和高・橋詰潤・吉田明弘 2016b「オーストリア・ 北チロル地方の中石器時代遺跡群と高山景観の巡検調 査」『資源環境と人類』6:87-97.
- Schäfer, D. (Hrsg.) 2011 Mensch und Umwelt im Holozän Tirols, Bad 1. Das Mesolithikum-Projekt Ullafelsen (Teil 1), 560 S. Verlag Philipp von Zabern, Innsbruck.
- Street, M., Baales, M., Cziesla, E., Hartz, S., Heine, M., Jöris, O., Koch, I., Pasda, C., Terberger, T., Vollbrecht, J. 2001 Final Paleolithic and Mesolithic research in reunified Germany. *Journal of World Prehistory*, 15 (4): 365-453.
- Taute, W. 1971 Untersuchungen zum Mesolithikum und zum Spätpaläolithikum im südlichen Mitteleuropa. Band 1: Chronologie Süddeutschlands. (unpubl. Habilitationsschrift des Fachbereiches Erdwissenschaften der Eberhard-Karls-Universität zu Tübingen)

- Taute, W. 1972 Funde aus der Steinzeit in der Jägerhaus-Höhle bei Bronnen. In Fridingen-Stadt an der oberen Donau. SS. 21-26, Jan Thorbecke Verlag, Sigmaringen.
- Taute, W. 1974 Neue Forschungen zur Chronologie von Spätpaläolithikum und Mesolithikum in Süddeutschland. *Archäologishce Informationen*, 2-3 (193-1974): 59-66.
- Taute, W. 1975 Ausgrabungen zum Spätpaläolithikum und Mesolithikum in Süddeutschland. In Ausgrabungen in Deutschland, Teil 1. SS.64-73. Verlag des Römisch-Germanishen Zentralmseums, Mainz.
- Taute, W. 1980 Einleitug. In Das Meolithikum in Süddeutshcland,
   Teil 2: Naturwissenshaftliche Untersuchungen. (Hrsg.W.
   Taute), SS. 7-10.Tübinger Monographien zur Urgeschichte,
   Band 5/2, 1978. Verlag Archaeologica Venatoria, Institut für Urgeschichte der Universität Tübingen.
- Terberger, T. 2014 Die Alt -und Mittelsteinzeit. In Atlas der Vorgeschichte: Europa von den ersten Menschen bis Christi Geburt, (Hrsg. S.von Schnurbein) . 10-57. Konrat Theiss Verlag.WBG, Darmstadt.

(2017年12月8日受付/2018年2月13日受理)

# Issues regarding the Early Mesolithic 'Beuronian' in southern Germany

Akira Ono 1\*

#### Abstract

Many cave and rock shelter sites from the Final Palaeolithic and Mesolithic are concentrated in the Upper Danube in southern Germany. Spanning the end of the Pleistocene to the Holocene, they have generated many studies of humans responding to the environmental change at the end of the ice age. Many studies of these periods, particularly the Preboreal, use the term 'Beuronian'. It is described as a set of cultural names consisting of three stages (Beuronian A, B and C) represented in Early Mesolithic stratigraphic layers of the Jägerhaus cave site in the Beuron Region of the Upper Danube. Excavation project leader W. Taute proposed this name, which became the standard stratigraphic name for chronology of the Early Mesolithic in southern Germany. A precise description of 'Beuronian' first appeared in Taute's Habilitation Thesis in 1971. Taute died before his monograph was published, and the definition of 'Beuronian' usually is taken from his brief papers or reports from the 1970s. This study discusses the significance of and issues surrounding his original definition in his Habilitation Thesis. Taute's definition is basically valid as a morpho-typological schema, but for practical purposes, Beuronian A and B are not clearly distinguishable, as several researchers note. Further precise parameters are anticipated with the publication of an excavation monograph of the Jägerhaus cave site now housed with the Institut für Ur- und Frühgeschichte und Archäologie des Mittelalters at Eberhard Karls Universität in Tübingen, Germany.

Keywords: Southern Germany, Upper Danube, Jägerhaus cave site, Early Mesolithic, Beuronian

(Received 8 December 2017 / Accepted 13 February 2018)

Visiting Researcher at the Organization for the Strategic Coordination of Research and Intellectual Properties, Meiji University, Japan

<sup>\*</sup> Corresponding author: Akira Ono (ono@tmu.ac.jp)